

リスク・コミュニケーションにおける異見や多様な情報がリスク意識や対話の効果へ与える影響

慶應義塾大学 正会員 ○水上 象吾
 慶應義塾大学 非会員 田中 美乃里
 慶應義塾大学 非会員 福井 弘道

1. 研究の背景と目的

高レベル放射性廃棄物 (High-Level radioactive Waste, 以下「HLW」) の処分問題では、国内における処分施設立地について国民の理解が必要であると指摘されている¹⁾。多様な価値観からなる利害関係に対応したリスク・コミュニケーション (以下「RC」) が必要であり、地域や時間に制約されない効率的な RC の一つとして情報通信技術を用いた手法が期待されている。廃棄物処理施設の立地問題に関しては、技術にかかわる心理的要因に加えリスク負担の公平性や管理の信頼性等、制度的認知要因が重要であり²⁾、RC ではリスクとベネフィットの両方の情報に基づく対話の効果が示されている³⁾。

本稿では、HLW 処分問題を事例に、インターネットを活用した対話の効果を修飾する要因として、情報や異見のかかわりを調べる。また、情報公開に対する意識や処分事業の関係機関への信頼感がリスクに対する意識に与える影響を探る。

2. 研究の方法

(1) 調査方法

本稿は、インターネット上の電子会議室への参加登録者を対象とした質問票調査に基づいている。サイト名は「高レベル放射性廃棄物・TRU 廃棄物 リスク・コミュニケーション広場」⁴⁾としている。アンケート調査は、参加登録時の事前アンケートとサイト参加後の事後アンケートを実施した。事前アンケートは2007年8月1日～2008年2月29日の間の登録者113名を対象とし、事後アンケートは2008年2月20～29日の間に登録者への回答を依頼し42名の回答を得た。

(2) 分析方法

まず、事前アンケートの結果より、HLW 地層処分に関する情報公開や関係機関への信頼が不安意識やリスクへの考え方へ与える影響を検討する。つぎに、事後アンケートの結果より、サイト評価や異見への態度を検討し、情報や多様な意見と対話の効果へのかかわりを考察する。本文及び要約統計表におけるカイ二乗検定による有意水準の表示は、** $P<.01$ 、* $P<.05$ とし、関係の強さはCramer 係数を V とする。

3. 分析結果

(1) 情報公開や信頼がリスクに対する意識へ与える影響

地層処分に関する情報公開の意識を質問文「HLW の地層処分に関する情報は、一般の人々にどのくらい提供されていると思うか。」に対する回答により測定した (cf. 図1)。放射性廃棄物処分事業の関係機関である「経済産業省資源エネルギー庁」に対する信頼感を調べた (cf. 図2)。また、HLW 地層処分に関する不安意識の回答結果は、「不安ではない」16.1%、「あまり不安ではない」16.1%、「やや不安だ」17.9%、「不安だ」39.3%、「わからない」10.7%を示す ($n=113$)。

以上の3項目のかかわりをクロス分析により検討した。その結果、各項目間に有意差が認められた (cf. 表1)。情報が提供されていないと感じる人ほど、不安意識が高い傾向が示されるとともに、関係機関を信頼できないとの回答傾向が高い。また、関係機関を信頼できるとの回答者は不安ではない傾向の回答を示すが、全体に不安傾向の回答割合は高く、関係機関を信頼するとの回答者でも不安傾向の回答割合が3割程度示される。

つぎに、地層処分のリスクと安全性に対する考えを尋ねた (cf. 図3)。また、不安感との関連性をクロス分析により検討した。結果、不安傾向の回答者は、「どのような理由があっても地層処分をするべきではない」、「100%の安全が確保できないのであれば地層処分をするべきではない」の選択割合が高いことが示された ($V=.442^{**}$, $V=.327^{*}$)。一方、「一定のリスクが生じるのは仕方がない

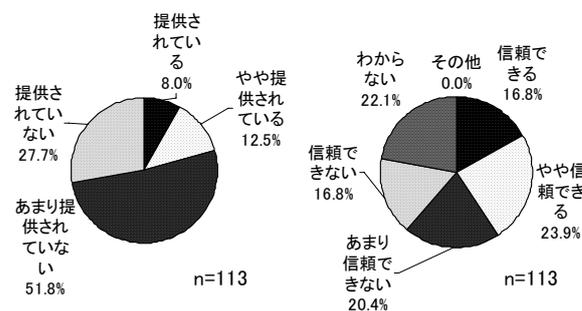


図1 情報公開の意識

図2 関係機関への信頼

表1 情報公開、不安感、信頼のクロス分析結果

項目間	cramer V係数
情報提供感と地層処分に対する不安感	$V=.364^{**}$
情報提供感と関係機関への信頼	$V=.382^{**}$
関係機関への信頼と不安感	$V=.408^{**}$
$n=113$	** $P<.01$

キーワード：リスク・コミュニケーション、高レベル放射性廃棄物、情報提供、信頼、対話の効果、異見

連絡先：〒252-8520 神奈川県藤沢市遠藤 5322 慶應義塾大学 e-mail: shogo@sfc.keio.ac.jp

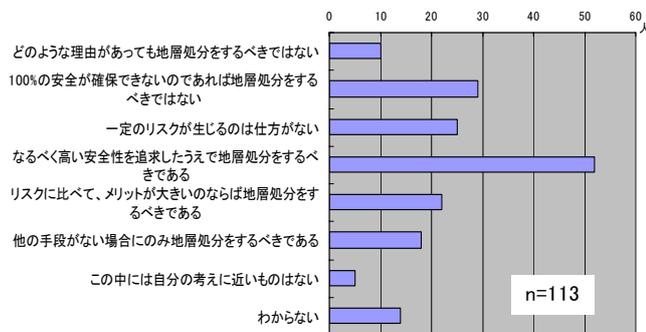


図3 地層処分のリスクに対する考え方 (複数回答)

い」との選択肢にも有意差が認められ ($V=.387^{**}$)、不安ではない傾向の回答割合が高い。

(2) 対話の効果を修飾する多様な情報や意見

つぎに、インターネットの電子会議室参加後におけるアンケート評価を検討する。まず、サイトの仕様評価を示す (cf. 図4)。質問項目「サイトの利用において、自分の考えと異なる考えがあった場合、あなたはどう思いましたか」との回答においては、異なる考えに対する理解や納得を示す選択の割合が高い (cf. 図5)。参加後のHLW等の地層処分についての関心や興味の変化としては、強くなったとの回答割合が 61.9%を示し、「特に変わらない」は、23.8%、関心や興味が弱くなったとの回答はない。インターネットを活用した対話の機会や場の効果に対する意識を示す (cf. 図6)。

以上の項目について関連性を検討する。サイトの仕様評価において、「情報や参考資料は役に立った」との回答者は、インターネットを活用した対話の効果に関して、効果的であるとの回答傾向が示される ($V=.598^{**}$)。一方、サイト評価において「とくに良い点はなかった」との回答者は、地層処分に関する情報が一般の人々に提供され

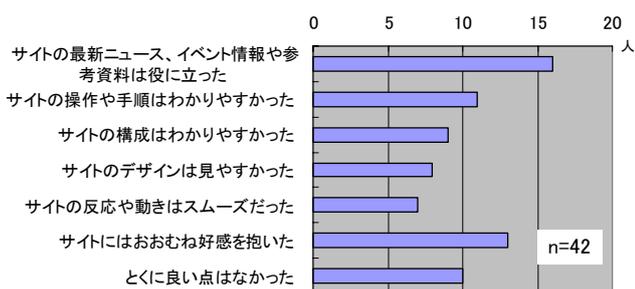


図4 サイトの仕様評価 (複数回答)

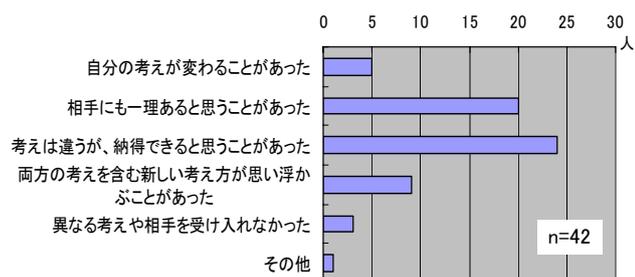


図5 異見への意識・態度 (複数回答)

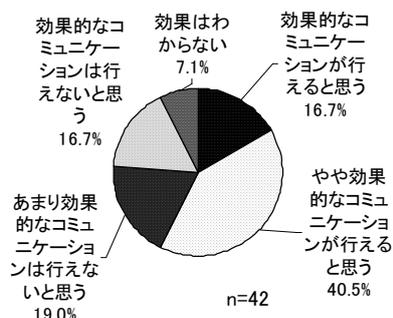


図6 インターネットによる対話の効果

ていないとの回答傾向を示し ($V=.511^{*}$)、参加後にも関心や興味に変化しなかったとの回答傾向がみられる ($V=.439^{**}$)。自分と異なる考えに対する意識については、「考えは違うが、納得できると思うことがあった」との回答者は、対話の機会や場に関して、効果的との回答傾向を示す ($V=.519^{*}$)。

4. 結論

HLW 地層処分に関する情報公開に対しては、あまり提供されていないとの認識が高い。情報提供感が高いほど、関係機関に対する信頼は高く、不安感も低い傾向がある。ただし、信頼していても不安感を示す割合は高い。関係機関の運営・管理体制にかかわるリスクへの不安意識以外にも、管理に留まらない過失等の人為的・技術的リスク、人為を越えた災害等の外部的リスク、漠然とした不安感等が存在すると考えられる。また、不安感とリスクに対する考えに関連性がみられ、不安感の高さがリスクの受け入れへの拒否感へつながっている。

サイトの仕様評価において、ニュース等の情報や参考資料が役だったとの回答者は、対話の機会や場に対して効果的との回答傾向が認められる。一方、サイト評価に否定的な回答者は、地層処分に関する情報が一般に提供されていないとの回答傾向がみられる。対話の効果には、情報にかかわる評価が影響すると示唆される。同様に、異見に対し納得や理解を示す人は、対話の機会や場は効果的であるとの回答傾向を示すことから、情報提供の充実に加え、多様な価値観による意見や異論、賛否両論等の存在が、RC における対話の効果に求められると考えられる。

参考文献

- 1) 坂本修一・神田啓治 (2002) 高レベル放射性廃棄物処分地選定の社会的受容性を高めるための課題に関する考察. 日本原子力学会和文論文誌, Vol.1, No.3, 18~29.
- 2) Kasperson, R.(1983) Acceptability of Human Risk. *Envir Health Perspect*, v.52, 15~20.
- 3) 木下富雄・吉川肇子 (1989) リスクコミュニケーションの効果 (1). 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 109~110.
- 4) 「高レベル放射性廃棄物・TRU 廃棄物 リスク・コミュニケーション広場」 <<http://de.gsec.keio.ac.jp/rcsystem/>>2008.4